

リトル・プリンスの星をたずねて

はじめに

☆大切なことは目に見えない

☆『星の王子さま』はこんなおはなし

1・星の王子さまってだれ

2・リトル・プリンスの旅たち

3・そして地球という大きな星

4・最後に王子さまはどこへ行ってしまおうの。

☆物語の星たちは何を意味するのだろうか

☆愛することを教えてくれたキツネ

☆ほんとうのおとなだけが知っている王子さま

☆かつて子どもだった私たち

☆あなたの心にもリトル・プリンスがいる

☆星の王子さまと時間の意味するもの

あとがき

「リトル・プリンス」という題名で私は、かなり大きなオブジェ（立体作品）を創りました。それがいま、小淵沢絵本美術館の入口にあります。リトル・プリンスというのは、あのサン・テグジュペリ作『星の王子さま』（フランス語原題＝「Le Petit Prince」）の英訳名です。

創作というのは、なにも無いところに、新しいイメージを形にしていかなければなりませんので、それはたいへんなもの。私がこの作品を創ったときも、ずいぶん考えに考え、やっとオリジナル・イメージができて上がりました。

作品を正面から見ると、王子さまが住んでいる星の輪があり、その上に王子さまが草に寝そべっています。よこには、お友だちになったキツネ。そのすぐ下に、王子さまが世話をして育てたバラ。大きな鳥が空を飛び、羽根のついた山、うずを巻いた雲がその山にかかり、太陽が輝いています。そしてたくさんのバラの花。

でも同じ作品を裏がわから眺めると、雲に見えたものが実はヒツジ。山だったものがゾウを飲みこんだ大へびだったのです。鳥のように見えただのは、自由に空間を飛んでいる羽根のある魚。太陽はハートや果実の集り。バラたちはたくさんの女性で、王子さまが大切に育てていた一つのバラは、わがままな女の子だったわけです。真実を知ることのできる心の目で見ると、どんなものにも意外な一面や新しい発見があるもので、そういうちよつとちがったモノの見方をするこの大切さ、それを表現したのがこのオブジェ作品なのです。

ところでこの作品を制作するとき、どんな人の心の中にも星の王

子さまが住んでいるにちがいない…、と思うようになりました。なぜそう思うようになったのか、そのわけをともに考えてみたいと思います。あなたの心にもきくと、あなただけの星の王子さまが住んでいるはず。では、あなたの王子さまを見つけるために、ごいっしょに”リトル・プリンスの星をたずねて”の旅に出かけることにしましょう。

「心で見なくっちゃ、ものごとはよく見えないってことさ、かんじんなことは目に見えないんだよ」(Il est très très simple : on ne voit bien qu'avec le cœur. L'essentiel est invisible pour les yeux.)  
私はこのことばをオブジェのテーマにえらび、作品にぎざむことにしました。このほかにも「星の王子さま」にはたくさん示唆(しさ)にとんだ、わかりやすい人生の哲学が用意されていて、なんと読んでも考えさせられ、くめど尽きない、いのちの泉を秘めているかのようです。

作者サン・テグジュペリは、物語の中でこのことばをキツネに語らせていますが、心をそえて見ることが大切で、目に見える一面だけでものごとを判断してはいけない、ということを現しています。人は見かけに

2

よらないもの、といますが、じつさい話しを聞いてみないと、さらにはいつしよにすごしてみないと、わからないことは多いものです。まして「愛」や「信頼」、「勇氣」や「知性」などのように、あきらかに目に見えないのに人間にとって大切なものはいくらでもあることを私たちは知っています。知っているのに、いざとなればわからない。自分の力で真実を判断できない。できないから、権威ある人の考えを聞きたがる。それがあたかも、自分の考えであつたかのように思いはじめるといふようになるのです。

3

「人は、気のきいたことをいおうとすると、なんとなく、うそをつくことがあるものです…」これは物語の中過ぎのところ、王子さまがだれもない地球の砂漠にまいおるところにかかれています。「星の王子さま」という物語の、もうひとりの主人公である飛行士の「ぼく」が語っているコトバです。もともとの意味は、点灯夫のいる星を旅してきた

王子さまの見てきたようすをもとに、地球上の各地のさわやかな朝が、もしかしたら、たくさんの点灯夫の休みないしごともきれない、という表現のところが、その説明としてかかれています。

この表現は真実を現したものではありませんが、ちよつと文学的で美しいたとえ、になっています。でも、ほんとうのことではないので、まちがわないように気をつけてね…、とっているのです。ほんとうのことというのは「地球の自転で太陽の見かけの位置が変わって朝になったり夜になったりする」わけですね。でもそれだけですと何とも味けないので、きまじめな点灯夫のしごとをたたえて、親愛の情をこめて、そういう表現にしたのです。

それがどうかしたの、と思われたかもしれませんが、でも私はこのフレーズ（ひとくぎりの語句）がもつともつと深い意味を包みこんでいるような気がして、なんとなくひかれるものを感じています。人がこの世

で生きていくとき、ほんとうのことだけしかいわないとしたら、とかくカドの立つことばかりで、ずいぶんギスギスした社会になってしまうことでしょう。ほんとうのことでないことをウソというわけですが、時と場合によつては、事実とちがうウソも、ほんとうのことより大切なときもあるもの、なのです。こういうウソをふくんだ表現も、じつさいには目に見えるものではありません。でも、そこにはやさしさ、思いやり、愛情という目には見えないものの鼓動を、私たちは感じることできるはず。です。

星の王子さまを読むときには、もう一つ大切なポイントがあります。それは、子どもの心で見る世界と、私たちおとなが感じる世界のちがいに気づくということです。そして、ほんとうに大切にしなければならぬモノとは何か、それを学ぶことなのです。

ですからとうぜんのこと、おとなが感じているふつうのできごとをた

くさん知れば知るほど、この物語はなんだか不自然な感じがいつぱいで、お話しストーリーもわけがわからないかもしれません。星と星の間を飛んで旅をするには、あんまり科学的な感じもしませんし、何をいつているのかわからないな…と感じるところもあることでしょう。でも、ほんとうに作者の表現したかったことがわかってくると、目には見えな

い、大切なことが理解できるようにかかれています。もともと童話というのは、けっして子どものためだけにかかっているわけではありません。どんなおとも、はじめは子どもだったわけですから、その子どもだったことのある、おとなのためにもかかっているからです。同じようにこのことは「星の王子さま」という、ちよつとふしぎなものがたりを味わうためにかかせないカギになっているのです。

もしこの物語がなんだか意味がわからなくて、あまりおもしろいと感じないとしたら、あなたはあなた自身の星の王子さまと出会うことがで

きないかもしれません。あるいはもし、この物語の内容だけを理解して満足してしまい、ご自分の心の中に王子さまの訪れがないとしたら、それは悲しいことです。王子さまはきつと、不安や悩みでいっぱいの中に、豊かな感情や考え方のゆとりをあたえてくれるにちがいないからです。子どものときにもっていた純粋な目と、おとなとしての豊かな感情をもってこの物語をじっくり鑑賞したいものです。するといつしか、奇妙に感じられた内容の展開も、ひとつひとつ意味があつて、その場そのときに必要があつて構成され、かかれているということが理解できるようになってくるはずです。

この物語は「むだ」なページが一つとしてありません。どこを欠いても、作者のいいたかったことが不十分になってしまうのです。読み取るためには、それなりに想像力をはたらかせながら、しかも作者自身と向かいあつてしつかり対話をするように内容を理解する努力が必要です。

ほんやり映画を眺めるような、受け身の気もちだけで作品を読むと、大切なことは何もわからないはずだ。

☆1 星の王子さまってだれ

「星の王子さま」の原作は、もともと「小さな王子」というタイトルの物語です。小さな星に住んでいる、幼い王子さまだったので、作者はこの少年がいつたいたいだれなのかを物語の中で最後までときあかしてはいません。でもカンの鋭い人はそれがだれであるのか、まもなく理解してしまうことでしょう。

10

ところで、まだ物語そのものを読んでいない人や、ずいぶん昔に読んですっかり内容を忘れてしまった人のために、かんたんな解説とともに、この童話のあらすじを紹介したいと思います。

まず、作者の友人であったレオン・ウエルトという人に、この物語をささげるといふまえがきから始まっています。このまえがきの中に、「レオン・ウエルトも一度は子どもだったから、私はその子どもに、この本をささげたいと思う。おとなはだれも、はじめは子どもだった。しかしそのことを、忘れずにいるおとなは、いくらもない：：」という、それこそ星のように美しく輝いている有名な文章に出会うことになりました。この童話のすべてがこのコトバに集約されているといってもいいくらいだと、私は思っています。

11

作者が6才のとき、「ほんとうにあった話」というおもしろい本を読みました。その中にこんな話があります。大へびがゾウを丸飲みしてしまい、半年もかかってゆっくり消化する、というのです。いったい大

へビがゾウを飲みこんだらどういふことになるのだろう、と考え、幼い作者はそのすさまじい大へビの姿を絵に描いてみたようです。そこで「これ怖い？」といいながら、おとなに見せたところ、だれもが「帽子がなんでこわいの？そんなバカなことはよして勉強しなさい！」ということになり、いらぬ幼い作者は画家になる夢をあきらめてしまったようです。いつも、こんなぐあいに、おとなは子どものもっている才能の芽をつんでしまっているのです。星の王子さまの著者が体験したように、子どものほんとうの才能を理解できるおとなというのは、いまでもとても少ないことには変わりはないのです。

作者はそんな体験があつてから、画家になろうということはすつかりあきらめてしまいました。そのかわり、世界中を飛びまわる飛行士になったのです。サン・テグジュペリがサハラ砂漠にいのちからがら不時着したのもほんとうのことで、そのときの体験から、星の王子さまが生ま

れてきたといつてもいいでしょう。

さて物語の続きですが、著者の「ぼく」が飛行機の修理をしながら、人が住んでいない砂漠で夜をすごして朝になると、ひとりの男の子が「ひつじの絵をかいて」と話しかけてきたのです。その子は、おなかがすいているようでもなく、道にまよっているようでもないのがふしぎ。いつ死んでもおかしくない、砂漠のできごとです。飛行士はその子に、幼いころかいた帽子の絵をかいて見せたところ、大へビがゾウを飲みこんだところじゃいやだよ、というのですっかりおどろいてしまいました。いままでにだれもわからなかった、大へビのあの絵がその子にはすぐになんかわかってしまいました。飛行士の「ぼく」は、あつげにとられてしまいますが、ふしぎなその男の子のためにヒツジの絵をかいてあげます。ところが、どんなヒツジも気にいりません。そこで飛行士は、箱を一つかいて、この中に君のほしいヒツジがいるよ…、といいます。男の子は、

こんなヒツジがほしかったんだ、といってよろこぶのでした。

男の子は、そのあと飛行士とお友だちになります。その子は小惑星のB612という、一つの家くらいしかないようなほんとうに小さな星に住んでいて、ときどき、バオバブというとても大きく大きな木の種が土の中から芽を出してくるとい話しもきます。ほっておくとどんどん大きくなって、しまいに小さな星がそのバオバブの根によってはれつしてしまうかもしれないのです。そこでその星にすんでいた男の子は、ヒツジという地球の生き物をもちかえって、バオバブがはえてきたら、すかさず食べてもらおうとしたのです。それはとてもいい思いつきでした。

王子さまが住んでいた星のことについて、さらにおもしろいお話がかかれています。実はこの王子さまが住んでいたB612という名前の星は、トルコのある天文学者が発見して、学者の集る会議で発表したと

いうことです。ところが、そのときの服装が学者らしくないので、だからも発表した星を信じてもらうことができなかったというのです。王子さまの星はじっさいにあったのですが、そのことを信じる人はさんねんながら、そのとき地球にはいなかったのです。

おとなとはそんなものだ、と作者はいつています。そして、けつしてひとごとでなくて、自分がそのときいたとしたらどうだったかな…、つて考えさせられてしまうようなお話です。

それともうひとつ、おとなは数字がほんとうに好きで、人のことを理解するときも、かんじんなことは聞こうとしないで、そのひといくつ？、きようだいは何人いますか、体重はどのくらい、給料はいくらもらっているの…、というぐあいなんです。たとえばバラの花が窓に飾っていて、屋根にハトがいる美しい家といつても、おとなの人にはピンとこないもので、5LDKで5500万円の家といわなければいけない、というわ

けです。

飛行士とお友だちになって5日目のこと、王子さまはヒツジが花も食べってしまうことを知り、大切に育てたバラが食べられるようなことがあってはたいへんなことに気がつきます。そして飛行士と、バラのとげは何のためにあるのかについて、いい争いをしてしまいます。王子さまは、花のとげが何のためにあるかを知りたかったのですが、飛行士は花はいじわるだから…、と答えたので、おとなと同じことしかいわない、そういうのは人じゃなくてキノコだ、と王子さまはカンカンになります。

そのことがあってから、飛行士はふしぎな男の子の星に一つの美しいバラの花があることを知ったのでした。そのバラのことを話すとき、王子さまは顔を赤らめるのでした。そして男の子はさみしさをこらえきれなくなり、飛行士に抱きついて泣いてしまいます。飛行士の「ぼく」は修理の手を休め、男の子を抱きながら、このままのどが乾いて死んでし

まってもいいような気もちになったのです。

そのあとヒツジの絵には口輪をかいて、花のためにヒツジに食べられないような囲いもかいてあげることにしました。王子さまの花はとても魅力的で、あまいにおいのする美しいバラでした。でも自分の美しさを自慢ばかりして、風が吹いてくるのがこわいからついたてを立ててちょうだい、おいしいお水をちょうだい、だのといってあまえてばかりいるのです。そんなバラのことがすっかりイヤになってしまった王子さまは、星にある火山のススはらいをして噴火しないようにしたあと、バラに水をあげて、さよならをいいました。バラは、王子さまに「あたしがバカでした、お幸せにね…」と、泣いている顔を見られないように見送ったのです。

飛行士はやつと、王子さまが小さな星からこの地球にきて、いまはその花のことが心配でならないということを知ることができました。この

あと王子さまは6つの星を旅して、とうとう最後に地球にたどりつくのですが、そのとき飛行士が砂漠で出会った王子さまというのは、子どもだったときの飛行士その人のことなのです。おとなのようにしか考えられなくなってしまうた人のことを、キノコなんだよ、といわれた飛行士は子どもだったときの自分の心をとりもどすかのように、王子さまをしっかり抱きしめたのです。キノコではなくて、人にならなければいけないんだ、というそのひとことがすっかり理解できるようになり、飛行士の「ぼく」は一瞬にして王子さまがだれであるのかを知るのでした。

王子さまの旅たちの日です。鳥たちがわたっていくのを見て、わずらわしいバラとも別れ、もっと広い世界のことが知りたいという思いにかられたからでした。

王子さまがはじめにおとずれた星は、王様のいる星でした。何でも命令するのが王様のしごとで、星がふさがってしまうほどの白テンのりっぱな毛皮をきていました。王子さまはその王様に、王様は何を支配しているのですかと質問します。王様は何もかも、と答えます。支配しているものには何でも命令することになりますが、王子さまは夕日を見せてくれるように命令してほしいというと、王様は、命令するにはタイミンクが必要だ、といってその命令を夕方に発令することにしました。たい

くつした王子さまが、また旅にでようとすると、王様は王子さまを法務大臣に任命するといって引きとめようとします。この星にはだれも住んでいないので裁判することもない、と王子さまがいうと、王様は自分を裁判するようにいいます。たしかに、王様のいうのはほんとうのことです、自分を裁判するのが一番むずかしいことなのです。王子さまは、おとなというのは奇妙なことをいうものだな…、と思いながら、次の星に行くように命令してくださいといいます。すると王様は、わしの大使として旅をするように命令する、というのでした。

2 番目におとずれた星には、うぬぼれ男が住んでいます。王子さまと出会うと男は、ばちばちと手をたたくように要求しました。王子さまがそのとおり手をたたくと、その男は帽子をもちあげてうれしそうにあいさつをします。なんでも同じことをするので、またもや王子さまはたいくつしてしまいました。それに何を聞いても、ほめることばや感心した

ことばしか耳にはいらないので、どうして人から感心されることがそんなにおもしろいのがわかりません。

3 番目におとずれた星は、のみすけのいる星でした。お酒のカラビンをならべて、だまりこくっていたのです。何でお酒をのんでいるの、と王子さまがたずねると、はずかしいのを忘れるためさ、というのです。何がはずかしいのかというと、お酒をのむのがはずかしいというのです。おとなというものは、実にふしぎなものです。

4 番目の星は、ビジネスマンが住んでいたのですが、王子さまがやってきても顔すら見ようとしません。たばこを吸いながら星の数ばかり数えようとしています。王子さまが質問しても、くだらんこと聞くな、といて星の計算をやめようとしません。星を数えて、数えたぶんだけ自分のものになるというのです。つまりは金持ちになるというのです。それが何の役にたつのかを王子さまが質問すると、ビジネスマンは最初

に見つけた人がその星の所有者になるというのです。さらにお金があれば、その星を買うこともできるわけです。そうして星をもつて、紙きれにその数をかいて、さらに銀行にあずけておくらしいのです。自分の星にある山の手入れをしたり、花の世話をすることで、山や花のためになつていけるけれど、星を数えても星のためにはなっていないんじゃない、と王子さまが質問すると、ビジネスマンは口を開けたまま返すことばがみつかりませんでした。

5 番目におとずれた星は、街灯が一つあって、それに火をともしたり消したりするしごとをしている点灯夫がいる星でした。王子さまはていねいにおじぎをして何をしているのかを聞きました。街灯ですから、夜になると火をともし、朝にはそれを消すというのです。命令だからといって、きちょうめんにそれをくりかえしているのですが、星の回転がだんだん早くなって、いまでは寝ることも休むこともできないでいるので

す。王子さまは、なんだかそのきまじめな人が好きになりました。でも今までに会ったどの人からも、きつと、けいべつされてしまうとも思っただのです。この星に住ませてほしいな、とも思っただのですが、あまりにも星が小さすぎるので、さらに旅たつことにしました。

6番目の星は、どこよりもずっと大きな星で、何冊も本をかいている年寄りの地理学者が住んでいました。でもその先生は探検家の話を聞くだけの人でした。探検家が信用できて証拠が見つければノートに書いていくというのです。王子さまが地理学者の星について、海のことや山があつたりするのか聞いても、自分の星のことは何も知らないようで、知ろうともしないらしいことがふしぎでたまりません。王子さまも自分の星のことを教えますが、花がいることは地理学者には関心がありません。王子さまがその理由を聞くと、はかないものは、かいてもしようがないからというのです。王子さまはそれまで「はかない」ということの

意味がわかりませんでした。そして、はじめて花の命の短さを知ったのです。王子さまは残してきたバラのことを思いだし、懐かしさがこみあげてきました。

このあと7番目の星は、地理学者が評判のいい星とっていた「地球」を見てみることにしたのです。おりたつたのは、サハラ砂漠の真ん中でした。地球ではいろいろな生き物と出会い、飛行士とも出会うことになります。

王子さまがはじめて地球を見たとき、どんなにおどろいたことでしょう。人がいない砂漠のまん中におりたったのですから、なんてさみしい星なのだろう、と思ったにちがいありません。そこはアフリカでした。へびと出会いますが、王子さまの足くびに巻きついて、ちよつとなぞめいたことをいいます。おれにさわったやつは、そいつがでてきた地面にもどしてやるんだ…、と。へびの毒で殺して、身体を土にかえしてやる、という意味です。むじやきな王子さまは、そのへびのほんとうの恐さを知らなかったのです。そのあと砂漠で出会ったのは、小さな花でした。人間はどこにいるのかを聞くのですが、その花が会った人間は、わずか数人でした。それも風に吹かれて歩きまわるだけなので、根もない不自

由な生き物だということです。

王子さまは人間を見つけるために、高い山に登りました。大声で呼んでも、こだまが返ってくるばかり。それが人間というものだと、はじめ王子さまは思ってしまったようです。やがて一本の道を見つけました。道というのは人間のいるところにつながっているのです。やつと、バラのたくさん咲いている庭に出たのです。王子さまは自分の星に咲いているのがバラだと思っていたのですが、同じような花が何千本とあるではありませんか。この世にたった一つしかないと思っていたのに、美しいバラがこんなにたくさん…。

けつきよく王子さまは、めずらしくもない花を一本、小さな火山を三つもっているだけだと知って、とても悲しい気もちになり泣いてしまいました。

そこへ、ぼくと遊ばないか、とキツネが現れます。かなしい気もちで

草にねそべっているときだったので、王子さまはキツネに「ぼくと友だちになって」といいました。キツネはいいます。まだ知りあつたばかりで、飼いなさらされていけないので、あそべないよ。飼いならすつてなにと王子さま。キツネは人間のする、飼いならすという意味を教えます。飼いならすというのは、仲よくなること。キツネは王子さまの星に、鉄砲をもっている人間がいなくて、追いかけてまわすニワトリがいたら天国のようなだけどな…といっています。

向こうに広がる麦畑を見ても、麦を食べるわけじゃないので、いまはなんにも感動しないけれど、もし王子さまが友だちになったら、麦畑を見るだけで王子さまのふさふさした金色の髪の毛を思いだして、すばらしいものに見えて胸がわくわくしてくるものなのだ、といいました。そして同じ時間にあそびにきてくれると、その足音をきくだけで、うれしくてたまらなくなってしまう。それが幸福というもの。そのためにはき

まりが必要だ、というのです。王子さまはきまりの意味もわかりませんでした。キツネは鉄砲をもっている人間が追いかけてまわす日にもきまりがあつて、村の踊りがある日にはそれがお休みになるので、キツネのあそび歩く範囲がぐんと広くなると説明します。

そんなことを話しているうちに、王子さまとキツネはすっかりお友だちになりました。こんどはキツネが、王子さまとの別れが悲しくて泣きだしそうになりました。王子さまと別れる前に、もう一度バラの花たちを見に行くようにキツネはいいいます。王子さまがふたたびバラの花たちを見たとき、キツネがいつていたことを思いだしていいいました。

「ぼくの星のたった一つのバラと、きみたちはぜんぜんちがうんだね」と。王子さまが大切に育てたバラの花は、たくさんのバラとは同じでないことに、王子さまはそのとき気がついたのです。キツネと別れるとき、キツネがいいいます。

「心で見なくっちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは目に見えないんだよ」

「そのバラの花がほかの花とちがって愛しいのは、そのバラのために『ひまつぶし』をしたからさ、人間はそういう大切なことを忘れてしまっているんだ」とキツネ。王子さまはそのことをわすれないように、くりかえしていいました。

そのあと王子さまは、特急列車がすれちがうのを見ます。乗客の荷物をのせたりおろしたりしている人と話しますが、王子さまは「人間は自分たちのいるところが気にいらなくて、いつもどこかへ行こうとしているんだね」とふしぎそう。すると荷物をはこんでいる人は「人間ってやつは、いるところが気に入るなんてありやしないよ」「子どもだけが、なにが欲しいかを知っているんだね」とこたえます。子どもは人形なんかにか話しかけたりあそんだりして、時間を使ったり「ひまつぶし」する

わけですが、そのことだけで幸福になれるのです。子どもは幸福になることの意味を知っていて、幸福になることだけを考えているものなのですから…。

はじめて飛行士に会う前のことです。王子さまは、すばらしい薬を売っているという商人に出会います。週に一つぶ飲むだけで、のどの乾きがなくなり、水を飲むために使う時間をまるまる節約できるという発明薬。王子さまは、水のある泉までゆっくり時間を歩いていくのに、と思いました。

31

王子さまが飛行士と出会って八日がたち、水も底をついています。飛行士は王子さまの体験した話しに心をうたれ、砂漠の中で井戸をさがすことにします。日が暮れて星が光りはじめました。

「星があんなに美しいのは、目に見えない花が一つあるからだよ」

「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているから」

30

王子さまがそういうと、飛行士のぼくも「星でも砂漠でも、その美しいところは目に見えないのさ」とこたえます。王子さまは友だちになった、あのキツネと同じことをいう飛行士が好きになりました。一輪の花をいつまでも大切に、忘れずにいる王子さまの顔は輝いています。やがて眠ってしまった王子さまを抱きかかえながら、飛行士は歩きつづけ、やつとその明け方に井戸を発見したのです。

砂漠のまん中に、村にあるようなりっぱな井戸を発見したふたりは、水をのみながらすばらしい贈り物を受けるような気もちになりました。そして王子さまはいいいます。

「バラの花をたくさん育てている地球の人たちは、自分たちの欲しいものが何なのかかわからずにいるんだ」「さがしているものは、たった一つのバラの中にも、少しの水の中にだってあるのにな」「でも心でないと見えないよ」と。王子さまはそのあと、飛行士にヒツジの口輪の絵をもらいます。王子さまが自分の星に帰るのだとわかると、彼はとても悲しい気もちになるのです。

つぎの日の夕方、井戸のそばで王子さまが、あの黄色いへびと話しているところへ飛行士がおとずれました。王子さまはへびに、はじめて地球に降り立った場所で、ちゃんと待っているように話しているのです。それを聞いた飛行士はおどろき、もっていたピストルをとりだそうとしましたが、へびはするりと砂の中にかくれてしまいました。すると王子さまは、飛行機がなおったことをすでに知っていて、二度びつくりさせます。飛行士は胸さわぎを感じました。王子さまの美しい声が、この日をかぎりにもう聞かれなくなってしまうような気がしたのです。

ちようど今夜で、王子さまが地球におりたって一年。頭の真上に王子さまの星がやってきていました。夜空の星をながめて、ぼくのことを思い出しておくれ、と王子さま。ぼくが星にいますと思うと、夜空の星が笑っているように聞こえるよ、と飛行士に話します。そしてまた王子さまは笑いました。

「今夜はぼくに会いにこないでね」と王子さま。飛行士はなんども、

ずっと王子さまのそばをはなれないよ、といいます。その夜王子さまは、砂漠のへびに会いにでかけてしまいます。飛行士が追いかけると、王子さまのあの弱い花を守ってあげるために、そのために帰るのをとめないで、と歩いて歩きはじめました。飛行士は腰をおろしたまま動くことができません。まもなく王子さまの足くびのところが黄色く光りかがやきます。あのへびです。王子さまは声ひとつ立てずにたおれ、そのまま息を引きとってしまいます。つぎの朝、そこに王子さまの姿はありませんでした。

36

王子さまはたしかに自分の星に帰りました。その星をさがすため夜空を見上げるたびに思うのです。王子さまの大切にしていたバラの花が、ヒツジに食べられてしまったかもしれない、と。食べられてしまったか、ちゃんと食べられずに美しく咲いているかどうか。そのことによって、世の中のあらゆることが変わってしまうのです。でもこのことが、どんなにだじななことなのかは、おとなになるにしたがつて、すっかりわからなくなってしまうものなのです。

☆

さあ、これが「星の王子さま」というお話しの大まかな内容です。少し悲しい最後のような感じがします。王子さまも私たちと同じように、へびにかまれて毒が身体をめぐり、苦しみのすえに死んでしまうということがほんとうは恐かったのです。でも、星に残してきたバラの花もとにかえってあげたかった…。その思いがあつたから、死の恐怖さえのりこえることができたのです。バラの花をほんとうは愛していること、そのことに気がつき、王子さまはバラのもとに帰ったのです。

37

作者サン・テグジュペリは物語の飛行士と同じ体験をした人で、サハラ砂漠にいのちからがら不時着したのもほんとうのことでした。ところで砂漠というのは、昼と夜ではまったくちがった世界になってしまます。昼は焼けつく太陽、夜は急激な冷えと満天の星空。生きてかえれないかもしれない、そんな恐怖のただ中で見上げる星ふる夜空というのは、おそらくこの世のものとは思えない美しさを秘めているものなのでしょう。そのときです、遠い記憶がよみがえり、幼かったときの飛行士その人が星のきらめきの中から地上にやってきたのでした。それは子どもだったときの飛行士、つまりかつての作者その人だったのです。

王子さまの星をはじめ、王子さまがおとずれる星というのはどれも小

惑星ということになっています。小惑星というのは、太陽系の中で火星と木星の間に軌道のある小さな星の群れのことです。あまりにも小さな星のかけらたちですので、地球からは火星や木星のようにハッキリ見えません。ほんとうの小惑星は、星のかけらと氷のかたまりですので、生きものが住むことはできないわけです。ではいったいこの星に住んでいた王子さまはじめ、さまざまなおとなたちは、なぜそこに住んでいたのでしょうか。そしてその星そのものは、なにを意味するのでしょうか。

「星の王子さま」に登場する星というのは、ひとつひとつが人間そのものであり、その人が関わりをもっている社会や家庭というものを意味しているのです。はじめ王様の住んでいる星をおとずれますが、その星というのは王様というひとりの人間との出会いを現しているのです。同じように、うぬぼれ男に出会い、ビジネスマンと出会い、のみすけと出会い、点灯夫、そして地理学者といったおとなたちと出会うことを意味

しているのです。それまでの王子さまというのは、子どもだけの世界しか知りませんでした。それまでは、自分の星しか知らなかったのですからどうせんのことです。

王様は人に命令することで、その人を自分の支配下におくのですが、なにも王様にかぎったことではありません。人はおとなになるにしたがつて、だれもがひそかにもつようになる気質でもあるのです。「せんばい、こうはい」の関係や「上司と部下」の関係、お金の流れによる関係、はたまた家柄や育ち、どのような教育を受けたかなどの背景によってさえ支配関係というのは生まれてくるものです。子どもときには、せいぜい体力のあるものが、そうでない子をひきいているのをよく見かけますが、おとなの支配関係というのはもつと利害に結びついたものといえそうです。

うぬぼれ男のお話しは、なんだかとてもこっけいな感じですが、意外にどんな人にもひそんでいる気質なのです。フランスの哲学者でサルトルという人がいましたが、かれはノーベル賞をもらうのをこわった一人としても知られています。うぬぼれ男のようになりたくない、なつてははずかしい、と思つたのでしょうか。どんな人も回りから拍手かっさいでほめられたい、と思うものです。悪い気はしないものです。あかんぼうとしてこの世に生まれたときは、幸福な気もちでいるとニコニコしていますが、そうでないと泣いています。「尊敬されて偉い人だと思われたい」とは考えていないはずですが、それがいつのころからか、人から尊敬されたい、先生といわれて立派な人だと思われたい、スターのように拍手かっさいをあびてみたい…、などとあれこれ思うようになるものなのです。

ビジネスマンと出会って、王子さまはますます、おとなとはへんなものだなと思うようになります。いそがしい人間の典型でもあります、

星を数えて自分のものにしてやうとするあたり、けんめいにお金を貯めている多くの人間のすがたそのものです。なんのために貯めるのでしょうか。あのビジネスマンのすがたを笑える人、そう多くはないはずです。あなたは、そんなことのない賢明な人なのですが、お金を得る楽しみのためにお金をためるということ、ありがちなことです。豊かに生活をするとということ、それをもとめるのはけっして悪いことではありません。ところがいつの日か、お金を貯めることそのものがよろこびとなってしまうもののようなのです。

のみすけと出会い、王子さまは人間の悲哀を感じるようになります。子どものころ、お酒を飲んで酔っぱらっている人を見かけて、いやだなと思ったことのある人は多いはず。はずかしいと知りながら、自分でもいやだと思いつつ、そのことを忘れるためにお酒を飲んでしまう人。すこしも悩みの解決にはつながりません。どうどうめぐり、です。タコ

が自分の足を食べるようなものです。どこかで、その因果関係を断ち切らなければ解決しそうありません。発想の飛躍、それが必要なのですが、王子さまはそのとき、「おとなはなんて不自由なんだろう」と感じたようです。

点灯夫にあつたとき、王子さまはおとなの中でとくに親しみを感じ、いい人だなと思いました。命令に忠実なけなげさ、星の回転が早くなっても、その命令に疑問を感じないでいる、いつしようにけんめいさ、それが愛しかったようです。小鳥や小さな生き物が子育てをしているときに感じる、あの愛らしさ、いつしようにけんめいさが、けなげに感じるのと同じです。自然界の生き物というのは、大自然の命ずるままに、忠実に生きようとするものですが、それに似た美しさを感じられたのでした。

地理学者との出会いは、ますます、おとなのふしぎさを王子さまに体験させることとなります。仕事部屋にとじこもったまま、感心のあるこ

としか知らない、知りたくもない、それでいて自分たちのやっていることがもつとも価値のある仕事だと思っている。学者がみんなそうだ、とはいませんが、それに近い考えというのはどうもありそうです。高尚なことをしている、という気もちになるのは、やはり独りよがり。地理学者の話も少しこっけいに思えてくるという点では、ほかの星とかわかりません。専門家といわれている人のおちいりやすいところですよ。そんなとき、王子さまだつたらどんな質問をするのだろうか、と自問してみるといいでしょう。きつと王子さまなら大切なことを気づかせてくれるにちがいありません。

